

経済政策と公共的意思決定

矢尾板俊平

1. 「市場」とは何か？

ジョン・ケイ著（佐和隆光監訳、佐々木勉訳）『市場の真実「見えざる手」の謎を解く』（中央経済社、2007年）では、ヤーギンとスタニスローの著作における「彼の「利己心についての主張」を「個々人による利益の追求は、蓄積されて社会を総体的に改善する」というアダム・スミスについての言及と要約を紹介している。（p. 119）

さて、有名な話に、アダム・スミスの「肉屋の話」がある。これは、肉屋は、なぜ、肉屋を営むのか、という問題である。答えは、肉を売ることが、自己利益的・合理的であるからこそ、肉を売るのである。しかし、肉を売るということは、その肉屋が自己の利益を追求すると同時に、肉を売ることによって、社会の便益が高まるのである。このような自生的な秩序こそが、市場原理の原点なのではないかと考えられるのである。

グローバリズム批判、格差論争など多くの「市場」への批判は、「市場は暴力的である」というものである。本当に、市場は暴力的なのだろうか？

しかし、「市場」という概念が内包する価値を考えれば、市場を発展させることこそが、グローバリズムや格差の問題を解決するために必要なことなのではないか？

市場が内包する価値とは、「選択の自由」(?)

2. 公共的意思決定方法としての「市場」

なぜ、「市場は暴力的である」という誤解が生まれるのか？

それは、意思決定方法としての「市場」への指摘が、「市場」の価値そのものに混同してしまうことが起因するのではないか？

公共的意思決定手段としての、『「政治」というチャンネル』、『「市場」というチャンネル』、『「倫理」というチャンネル』。

3. リベラルパラドックスの問題

「市場」の概念に内包される価値（「選択の自由」）の追求を考えた場合、その基準はあるのか？

リベラルパラドックスの問題：「自由主義とパレート主義は、両立しない」。

○ 『チャタレー婦人の恋人』

・ 3つの社会状態の選択肢

x: 個人1が読む

y: 個人2が読む

z: 誰も読まない

・ 個人1の選好順序: $z > x > y$

⇒ ①誰も読まないのが最も良い、②自分（個人1）が読むのが2番目に良い、③個人2が読むのが3番目に良い。

・ 個人2の選好順序: $x > y > z$

⇒ ①個人1が読むのが最も良い、②自分（個人2）が読むのが2番目に良い、③誰も読まないのが3番目に良い。

組み合わせ	個人1	個人2
z,x	$z > x$	$x > z$
x,y	$x > y$	$x > y$
z,y	$z > y$	$y > z$
	$z > x > y$	$x > y > z$

・ Senの条件

(1) 条件U（広範性）：選好順序は、どのようなものでも良い。

(2) 条件P（パレート原理）：全員が一方の選択肢より他方のそれを選好すれば、社会もそのように評価すべきだ。

(3) 条件I（独立性）：任意の2つの選択肢に関する社会的評価は、両者に関する個々人の選好順序だけに依存すべきだ。

(4) 条件L（リベラル（自己決定領域））：自己の選好順序にしたがって社会的な選好順序が定まるような2つの社会状態の組を、少なくとも1つは持っているような個人が2人以上いる。これはこの2人にとってそれぞれの「自己決定領域」になり、これらの対に関する社会的な選好順序は当該個人の選好順序にしたがわなければならない。（自己決定領域を社会的選択の中に明示的に埋め込む）

・ このとき、パレート主義（条件P：社会的に一致する推移律）を採用すると、 $x > y$ を全員が選好しているので、「個人1が読む」という選択が社会的になされる。

・ 自由主義（条件L：個々人の推移律）を採用するならば、次のような選択が行われる。

→個人1に関わる問題： x (個人1は読む)， z (個人1は読まない) $\Rightarrow z > x$

→個人2に関わる問題： y (個人2は読む)， z (個人2は読まない) $\Rightarrow y > z$

・つまり、パレート主義の場合は、個人1が読むことになるが、自由主義の場合には、個人2が読むということになり、社会的な決定の結果が異なる。

・さらに、条件Lを考えたとき、 $y > z > x$ という推移律が成り立つ。ここに、条件Pも含めると、 $x > y$ なので、 $x > y > z > x$ という循環が起きてしまう。→これをリベラルパラドックスと考える。

・リベラルパラドックスからの脱出

Senのアプローチ：条件Pの緩和（共感とコミットメント）

→人々は、社会的決定のために、自己の選好順序を変更する準備があるとする。

Buchananのアプローチ：条件Lの緩和（「自由の限界」）

→「公」と「私」の境界線を定める。そのためのルール（Constitutional rule）を、立憲的な合意の下で設定する。（→財産権の設定）

・Senは、社会的選択の中に、「自己決定領域」を埋め込み、Buchananは、「自己決定領域」と「公共的決定領域」を分離する、という点で違いがあると言える。

・「自由主義をどこまで許容できるのか」、という問題は、その社会の文化、倫理などの問題に深く関わってくる。この点で、「信頼」の議論、Social Capitalの議論が重要になってくる。

4. 市場の失敗、政治の失敗

・市場の失敗

(1) 独占の問題

(2) 外部性の問題

(3) 格差の問題

(4) 情報の非対称性、不確実性、モラルハザード問題

・政治の失敗

(1) 既得権者の存在

→既得権者と弱者の共謀 (Rajan and Zingales 2003)

→既得権による経済効率性の悪化、既得権者の集合行為 (Olson 1965, 1982)

- (2) 情報の不確実性、政策の誤謬問題
- (3) 多数派の横暴

[参考 1]

・「制度」に関する 3 つの考え方

(1) **制度経済学**[North(1990)] : 「制度は社会におけるゲームのルールである。…それは人々によって考案された制約であり、人々の相互作用を形づくる。したがって、制度は、政治的、社会的、あるいは経済的、いずれであれ、人々の交換におけるインセンティブ構造を与える。制度変化は社会の時間的変化の様式を形づくり、それゆえ歴史変化を理解する鍵となる。制度が諸経済の成果に影響を与えることは、ほとんど争う余地がない。長期にわたる諸経済の成果の相違が基本的に制度発展の様式によって影響されることもまた、争う余地がない」

(2) **立憲的政治経済学**[Buchanan (1991)] : 「経済過程での合理的選択行動のためには、個人は経済の構造（ルール）を固定されたものとして、すなわち、ひとりひとりが個人的に企図した変更には影響されないほぼ絶対的なものとして、受け入れなければならない。たとえば、誰のものであれある個人の認められた権利の範囲内にある交換前の財産は、経済の構造によってまたその構造のなかで規定される。すなわち、そのような個人は、それぞれ自分だけで、これらの所有権構造を修正することはできない。「立憲的選択は、ひとびとの共同社会あるいは集団にとってのルールの選択にかかわる。選好されるルールは、まさにその性質上、それらがそれぞれの共同社会のなかで行われる行動や取引の条件を規定するという意味で、公共的(public)である」

(3) **比較制度分析**[Aoki (2001)] : 「制度とは、ゲームがいかにプレイされるかにかんして、集団的に共有された予想の自己維持的システムである。その実質 (substance) は、特定の均衡経路の際立った、不変的な特徴を縮約して表現したもので、ドメインにおけるほとんどすべての経済主体によって自分たちの戦略選択に関連があると認知される。そのようなものとして、制度は経済主体たちの戦略的相互作用を自己拘束的に統治 (govern) する一方、不断に変化する環境のもとで彼らの実際の戦略選択によって再生産される。」。(この点において、「内生性」、「情報縮約」、「頑健性」、「普遍性」、「複数性」という五つの要素が含まれていると指摘している。)

・「制度や基本ルールは、常にその制度の内にある人びとの厚生を高めるために存在するもので、過去の人もしくは未来の人のためのそれではなく現在そこにある人びとのためのルールや仕組みや機関なのである。(横山 2005)」

[参考 2]

社会的厚生関数について

社会状態をどのように評価すべきか？
この見方によって、選択される政策は異なってくる。

- ・ ベンサム型

$$W_B = U_A + U_B$$

- ・ バーグソン=サミュエルソン型（一般型）

$$W = w(U_A, U_B)$$

- ・ ロールズ型

$$W_R = \min(U_A, U_B)$$

- ・ 平等主義

$$W_E = U_A = U_B$$

(参考文献)

- Aoki, M. (2001), *Towards a Comparative Institutional Analysis*, Massachusetts Institute of Technology.
- Buchanan, James M. (1975), *The Limits of Liberty: Between Anarchy and Leviathan*, The University of Chicago Press
- Buchanan, James M. (1991), *The Economics and the Ethics of Constitutional Order*, University of Michigan Press.
- Friedman, Milton and Friedman, Rose(1979), *Free to Choose*, Harcourt North, D.C. (1990), *Institutions, Institutional Change and Economics Performance*, Cambridge University Press.
- Olson, Mancur. (1965), *The Logic of Collective Action: Public Goods and the Theory of Groups*, Harvard University Press
- Olson, Mancur. (1982), *The Rise and Decline of Nations: Economic Growth, Stagflation, and Social Rigidities*, Yale University Press
- Rajan Raghuram G. and Zingales Luigi. (2003), *Saving Capitalism from Capitalists*, Crown Business
- Sen, Amartya, (1970), *Collective Choice and Social Welfare*, Holden-Day, Inc.
- Sen, Amartya, (1982), *Choice, Welfare and Measurement*, Basil Blackwell Publisher
- 盛山和夫 (2006), 『リベラリズムとは何か-ルールズと正義の論理-』, 勁草書房
- F. A. ハイエク (田中真晴・田中秀夫編訳) (1986), 『市場、知識、自由-自由主義の経済思想-』, ミネルヴァ書房